

歴史的視点で捉えたペー(白)族

—雲南省大理盆地で調査する人類学者の考察—

横山廣子(国立民族学博物館/総合研究大学院大学文化科学研究科)

1. ペー(白)族とは

—人口—

2000年センサス:全国185.8万人(少数民族中14位)、大理白族自治州108.5万人(州総人口328.6万人の33.0%)、大理市約31.7万人(市総人口50.2万人の63.2%)

2008年末:大理白族自治州116.2万人(州総人口約345.7万人、うち漢族が約49.9%、ペー族33.6%)

—生業基盤— 盆地(「壩子(パーツ)」)の民

稲作地帯 二毛作農業:春~夏:コメ、トウモロコシ 秋~春:コムギ、ソラマメ

副業経営 ← 人口密度が高く、耕地不足

以前から出稼ぎ(小商い、“馬幫”、優れた大工)/地元周辺での小商い、機織り

—雲南と大理の歴史—

漢代:「西南夷」の地(『史記』、『漢書』)/ 前109 前漢の武帝が益州郡設置

618~	960~	1279~	1368~	1644~		1911~	1949~	
唐	宋	元	明	清		中華民国	中華人民共和国	
.....								
7c. 半	738	937	1253	1381	17c.	18c.	1856~	1956
南	皮	大	蒙	明	反	★ ★	杜	大
詔	羅	理	古	軍	清	康 乾	文	理
国	閣	国	軍	の	抗	熙 隆	秀	白
	が		の	雲	争	年 年	の	族
	唐		大	南		間 間	大	自
	か		理	征			理	治
	ら		征	圧			政	州
	賜		圧				権	成
	名						~1874	立

—民族名称—

1956年「白族 baizu」/直前の論争:漢族か少数民族か/確定前の漢語名:「民家 minjia」

2. 民族のカテゴリーをあらわす名称

異なる言語や風俗習慣の人びとがともに存在する場では、名づけをする側が自らの視点で相手方の何らかの特徴をとらえた名づけをし、双方向的に共通の名称が使用されるとは限らないし、異なる次元で分類がなされることもある。

— 中華人民共和国成立以前の大理盆地での民族のカテゴリーをあらわす名称 —

盆地に居住する3種類の人びと：漢族：漢語、ペー族：ペー語（漢語）、回族：漢語／ペー語
↓ *生態学的環境や経済的水準に明白な違い
山地の人びと：leigar（ペー語），「夷」（漢語）

盆地の人びと（ペー族、漢族、回族）同士の間：

【漢族と白族から見た分類】

漢語：	民家	／	漢人，漢民	／	回人，回民
ペー語：	bai-ni, bai-zi	／	ha-zi	／	huhui
	sua-bai	／	sua-ha		*言語による境界

【回族から見た分類】 *宗教による境界

漢語：	回教	／	漢教（漢族とペー族）	*「三教」＋夷教（山地の少数民族）
ペー語：	huhui	／	gabai（ペー族と漢族）	

3. 楚雄彝族自治州における調査からエスニシティ（民族のあり方）について考える

— 楚雄州における民族構成と歴史的背景 —

1990年の人口調査によれば、楚雄彝族自治州の全人口約230万人中、民族別の内訳は、漢族が約163万人でほぼ7割に達し、つづいてイ族が約56万人で、約4分の1を占めている。この両民族だけで人口の94%以上になり、それに続く苗族、回族、タイ族、ペー族の各人口は、いずれも2%を上回ることはない。主要民族である漢族と彝族は、それぞれ平地と山地を主たる居住地としており、ほぼすみわけの状況が見られる。

しかし、楚雄州は他の雲南各地と同様に、かつては西南夷の地とされ、現在の漢族は元代以降、とりわけ明代以降にこの地に流入した人びとである。元代の楚雄州の平地には、漢族以上に、現在のペー族の先人とされる「白人」が多数居住していた。清代半ばまでは、州内の各地で「白人」の存在が記録されている。しかし、近代以降、大量の「白人」が漢族の中に融合していったとされ、今日のようなごく少数のペー族人口を残すことになった。

1990調査の州内のペー族人口は12,457人で、そのうちの6割以上の7,656人は南華県に住む。そこにはペー族の村が集中する地域があり、雨露白族郷がある。この地域では何百年間もペー族が集居する状態が維持されてきた。

— 楚雄市郊外の漢族の状況 —

楚雄州の中心地、楚雄市鹿城鎮の郊外20キロ余りの東華鎮および子午鎮の住民の大多数は漢族である。しかし、人びとの祖先に関わる言説にはいくつか興味深い点がある。

この地域の祭りとして有名な「火把節（たいまつ祭り）」について、漢族の中でその期日

に違いがあり、一般に「民家籍」は6月25日、「江西籍」は6月24日といわれている。民家籍の者は大理から来ており、それは楊、王、高、段の姓の者たちであるという。これらの姓は、現在もペー族の間で特に多いことで知られている。

火把節は雲南各地の多くの民族に見られるが、現在、大理白族自治州では6月25日、楚雄彝族自治州では6月24日がその日とされ、1日ではあるが、違いが見られる。

しかし、さらに聞いていくと、自らの家系を民家籍という者の中に、民家籍でありながら、また江西籍でもある、という者があり、また、祖先は大大理から来た南京籍あるいは山西籍であるという者もあり、その祖先に関する言説は多くの矛盾をはらんでいる。山西籍という者の中に祖先に関する文字記録を伝承している持がおり、そこには「山西籍」と並んで、祖先は「葉榆（大理の旧名）」から来たとも記されている。さらにその祖先は、かつて大理地域に多く見られた3文字からなる名前を持っていた。

また、この地域には「バイイー（僂夷／擺夷）墳」と呼ばれる古い墓があり、それは漢族がこの地に来る以前にここに住んでいたバイイーのものであるという。バイイーは、漢族がやってきたために、ここを去った。それを「漢到夷走」というのだという。したがって、バイイー墳は、自分たちの祖先のものではない、と述べるのだが、彼らが「バイイー墳」と呼ぶのは雲南各地に分布する火葬墓であり、大理を中心とする文化とのつながりが見られる。

土地の人びとの中にバイイー墳にはバイイーの文字が刻まれているのだという者がいる。その墓にあったという石碑を見ると、人びとがバイイーの文字といているのは、仏教經典と関係の深い南アジア系のデーバナーガリー系の文字であった。中国では一般に「梵文」と呼ばれるこれらデーバナーガリー系の文字は、大理地域の火葬墓とともに見つかる墓碑にもよく見られる。

以上から、現在、楚雄市郊外の東華鎮や子午鎮に居住する漢族の人びとの中には、祖先が大理の文化と深いかかわりを持つ人びとがいることが推測できる。

－南華県の白族との対比による考察－

現在でも白族が集中して居住している楚雄州南華県雨露郷でも、火把節や「バイイー墳」はあるが、そこでは、火把節は州内の一般の彝族と同様の6月24日に行われる。また、彼らの祖先の来歴については、山東や河南が故地として挙げられるが、祖先はそれらの原籍地から大理に来て、それからいくつかの地を経て雨露にたどり着いた、という話の筋書きが一貫して明確であり、民家籍とその他の籍が対立して語られることはない。「バイイー墳」に関しても、それを自らの祖先の墓と断言する者はないが、「漢到夷走」の言説は聞かれなかった。

楚雄市郊外と雨露郷との対比から、漢族との対峙が自らのアイデンティティの変更を迫られることになるような状況下では、「類別」にかかわる厳しい状況のゆえか、あるいはその記憶をのこすゆえか、また弱者としての状況に適応しつつ自らの特徴をどこかに残す選択の結果か、民族的集団間の境界や関係を語り、説明する言説が多く生まれるように思われる。

<参考文献> 横山廣子 1998「雲南における白族と漢族の関係－民族的アイデンティティの変化に関する考察－」周達生・塚田誠之篇『中国における諸民族の文化変容と民族間関係の動態』（国立民族学博物館調査報告8：449-465）。